

球技の戦術の諸概念に関する一考察
——G. スティラーの戦術の諸概念の考察と補足——

稲垣 安二¹・荒木 郁夫²・北川 勇喜³・上平 雅史⁴
武井 光彦⁵・清水 義明¹・畠山 栄一⁶

(昭和 60 年 12 月 2 日受付)

A Study on Conceptions of Tactics in Ball Games
——Investigation on G. Stiehler's conceptions
of tactics and supplementary study——

Yasuji INAGAKI, Ikuo ARAKI, Yuki KITAGAWA, Masashi UEHIRA,
Mitsuhiko TAKEI, Yoshiaki SHIMIZU, and Eiichi HATAKEYAMA

The purpose of this study is to consider G. Stiehler's general and special conception in ball games and to get a new conception and its object.

Followings are the results of study.

- (1) G. Stiehler's conceptions of tactics in ball games are recognized as valid.
- (2) While adding the tactics system and the practice system to the general conception A of tactics in ball games, the authors define their respective conceptions.
- (3) While adding the control of the space and the vision, etc., to the general conception B of tactics in ball games, these conceptions are then defined by the authors.
- (4) The object of special conceptions of tactics in ball games is divided into tactical action and prerequisite conditions, also with explanation of each conception.
- (5) It became clear that a systmatization is developed from general conception to special conception in both cases.

I. 緒 言

G. スティラーは、その著「球技戦術論¹⁾」のなかで、「球技論ないし球技戦術論を科学理論としていくためには、基礎概念の統一且厳密な定義を欠いてはならない。ところで、現在刊行されている専門文献をみると、依然として大雑把で不適當な多種多様な戦術の概念の定義が横行しているように思われる²⁾」と述べ、球技の戦術の包括的、科学的な理論の構築には戦術の概念を明確にとらえることが必要であることを強調している。

ところで、わが国における各球技の多くの専門雑誌や図書等を見るに、球技の戦術の種々な概念の定義については、筆者らの知る限り殆んどみられないようであるが、しかし強いて言えば、それらの図書等のなかに、各種目の特定な特殊戦術²⁾の用語について、簡単な説明が

見られる程度である。

このようなことから、わが国における球技の戦術の種々な概念については、まず先進の諸外国におけるこれらに関する先行文献の研究が必要になろうが、しかし、諸外国においても多くの場合、球技の戦術の種々な概念については、わが国と同様に特定な特殊戦術の用語の説明がみられる程度で、種々な戦術の概念を特定な視点等によって明確に定義しているような文献は、極めて少ないようである。

このようななかで、H. デーブラーの球技運動学³⁾や、G. スティラーの球技戦術論¹⁾は、球技の種々な戦術の理論的な研究についての成果であり、そのうち特に、G. スティラーのそれは、球技の戦術に関する理論的な集大成であると考えられる。

¹ 球技Ⅰ, ² 岡山大学教養部, ³ 球技Ⅱ, ⁴ 球技Ⅲ, ⁵ 筑波大学体育科学系, ⁶ 城西歯科大学,

そこで小論は、G. スティラーの球技の戦術の一般概念 (A)、一般概念 (B) と一般概念 (A) の各対象の概念並びに球技の戦術の特殊概念を紹介し、これらを特定な視点によって考察する。つぎに、G. スティラーの球技の戦術の一般概念 (B) の各対象は用語のみの記述であるので、これらや G. スティラーの球技の戦術の一般概念 (A) 一般概念 (B) の各対象にはみられない各対象や、球技の特殊戦術の対象を筆者らがこれまでの研究から得た知見や、球技の戦術で一般化された知識に基づいて論述する。更に、球技の戦術の一般概念と特殊概念の関連性等の論述である。

II. 球技の戦術の諸概念

1. G. スティラーの戦術の諸概念

G. スティラーは、球技の戦術の諸概念を一般概念と特殊概念の2つに大別している¹⁾。

(1) 球技の戦術の一般概念

球技の戦術の一般概念には、(A) と (B) の2つの概念があげられている。

i. 球技の戦術の一般概念 (A) とその対象

球技の実際において、直接的にみられる諸々の行動を特徴づけるものではなく、理論上の一般妥当性ないし理論的な基礎の問題に関係している全ての概念である。そしてその対象に、球技の戦術、戦術行動、戦術の要素、戦術の手段、戦術の原則、戦術の規則等をとらえ、それらの諸概念を論述している。

以下は、氏のとらえる各対象の概念である。

① 球技の戦術

G. スティラーは、球技の戦術について先行研究者等の論述する諸概念のなかから、対蹠的な2つの概念として¹⁾、クラマー (D. Cramer) の「サッカースポーツにおいて、戦術とは、ゲームにおける技術的手段の応用に関する理論である」と、ツウェットリン (P. H. Zetline) の「戦術という言葉は、一般的にはプレーヤーが勝利をうための目的にかなった行動と理解されている」をあげた後、戦術の概念には、更に幅広い使用法があるとして、前記の先行研究者等のなかから、コスロウ (Koslow) は、「戦術とは、個人的行動と集団的行動の編成である」、カシュウロー (Kaschuro) は、「プレーヤーのとりべき処置と行動隊型の決定」であり、モンハイマーとシュミット (R. Monheimer/O. Schmidt) の場合は、「ゲームの窮局的目標へ向う計画的な努力」、オットー (K. Otto) の場合は、「全てのプレーヤーの相互理解の合流」、アルカジュウ (Arkadjew) の場合は、「敵と競うことの

できる能力」であり、ドイツ体育大学サッカー研究部門では、「戦術とは、合目的な個人的且集団的行動をもって、敵を効果的にうちめすために使われる競争方法である」をあげている。G. スティラーは、球技の戦術の概念を、「競争の指揮に関する理論であると共にその場で最も有効な競争手段に関する理論である」と定義している。

② 戦術行動

「球技における戦術行動とは、最も可能な成果へと向かう個人的行動ないし集団的行動のことであり、その行動は合法的なルールや確定されたゲーム・システムの範囲でプレーヤーによって意識的に実施されるものである」。

③ 戦術の要素

「球技における戦術の要素とは、技能とコンディション、調整力の有意な投入から生じた戦術行動の最小単位である」。

④ 戦術の手段

「球技における戦術の手段は、基本的な不断の繰り返される個人的ないし集団的な戦術行動であり、その行動はバラエティに富んだ形態において現われ、プレーヤーにとって独創的に展開されうるものである」。

⑤ 戦術の原則

「戦術の原則とは、プレーヤー達の総てのゲーム経過にとって有効且つ不可欠の戦術上の行動方式に関する概念上で一般化された認識のことである」。

⑥ 戦術の規則

「戦術の規則とは、球技の特定の局面あるいは状況において、簡潔な命題で説明されたプレーヤーのとりべき適切な行動方式のことである」。

ii. 球技の戦術の一般概念 (B) とその対象

全ての球技種目に共通して現われる戦術の実際の一般妥当的な概念である。その対象にオフense、ディフェンス、フォーメーション、システム、行動範囲、欺騙ないしフェイント等をあげているが、しかしこれらの対象の諸概念については論述されていない。

(2) 球技の戦術の特殊概念

一種目の球技にしか現われることのない特殊な戦術行動、もしくは複数の類似した球技種目間で使用されている戦術行動に係わるものである。ただし、複数の球技種目間において同一概念が認められるとはいっても、実際には当該の球技種目ごとにみられる戦術行動の具体的な形態において異なるものである。すなわち、バスケットボール、ハンドボールおよびラグビーにおける「出場停

止」はその1例である。球技の戦術の特殊概念の対象については、1例のみでその概念については記述されていない。

2. G. スティラーの戦術の諸概念の考察

(1) 分類の視点

G. スティラーが、球技の戦術の諸概念を一般概念と特殊概念の2つに分類する視点は、事物や事象の性質等の把握に多用される「一般と特殊」である。即ち、一般とは全ての事象、ここでは全ての球技の戦術に共通にとらえられ、特殊とは、個々の事象、即ち各球技種目の戦術にとらえられる。このような分類の視点は一般的で、妥当性も高い。

また、事象を一般と特殊に分類する場合には、最初に一般にかかわる事象がとらえられ、その相対として特殊にかかわる事象をとらえることが、方法論上重要になるが¹⁰⁾、G. スティラーの球技の戦術の諸概念の論述は、これらについて適切であるので、氏の分類の視点ならびにこれに基づく方法的な手順は、一般的であり従って妥当性も高いように思われる。

(2) 球技の戦術の一般概念 (A)、(B) とそれらの対象

球技の戦術の一般概念 (A) とその対象は、球技の戦術の諸概念を体系化する場合に、いずれも一般的、理論的な基礎にかかわる概念とその対象としてとらえられる必要性のあるもので、氏ののべる概念や各対象には妥当性がみとめられよう。つぎにそれらの対象の諸概念をみることとする。

球技の戦術の概念は、G. スティラーも述べるように幅広い種々な概念がみられ、それらは国際的に十分解決されていないので¹³⁾、いずれの概念に妥当性がみとめられるかについては明言することができない。しかし筆者らは、日本体育大学紀要 (以下紀要と略称)、第14巻、第2号、球技の戦法の基本概念に関する一試論⁷⁾や小論、II-1-(1)-i-①の論述にみられるように、G. スティラーの戦術の概念を支持している。

戦術行動は、球技の実際にみられる課題解決のための攻撃行動や防御行動のことになる。これらの行動は、単なる攻撃側や防御側の動きではなく、集団的成果等を達成するに役立ち、かつ意識的であるという性格がそなわっている他に、戦術的に行動するためには、合法的なルールやゲーム・システムの範囲で行なうことも必要になるので、氏の述べる戦術行動の概念には妥当性がみとめられよう。

戦術の要素は、一般に要素とは必要なもと (成分)¹⁰⁾

で、事物の構成の最小単位のことになる。球技の戦術行動は、スポーツ運動技術、身体的諸力としてのコンディショニング、知能、選択反応能力並びに集団意識¹³⁾等の諸前提を最小単位として構成されるが、氏の球技の戦術の要素には、これらがみられるので妥当的であろう。

戦術の手段では、手段とは手だて、仕方、方法¹⁰⁾のことである。球技の戦術では、戦術の目的、目標を達成するための方法になる。それは個人的、集団的な行動でありまた創意に満ちた種々な形態のなかの競争行動になるので、氏の述べる手段と一致する。

戦術の原則、規則について、原則とは共通な根本的な定めであり、それは一般化された認識より得られる。換言すると行動についての有効、不可欠の一般化された認識のことになる。規則は一定のさだめのことで、これは球技の特定な場面にみられる¹⁾1つの判断を言葉でいい表わされた行動方式 (例えば、ゾーンディフェンスの攻撃には間をつけ) のことになり、氏の述べる原則と規則の概念は一般的にとらえられ妥当性がみとめられよう。

また、球技の戦術の一般概念 (B) とその対象についてみるに、一般概念 (A) が全ての球技の戦術に共通する理論上にかかわる概念に対し、一般概念 (B) は、全ての球技の戦術に共通して実際にかかわり個々の戦術行動にかかわる概念であって、両概念は、理論と実際に分類されていることから妥当性がみとめられよう。また一般概念 (B) の対象であるオフenseを初めとする6項目等は一般概念 (B) を視点にするといずれも妥当性がみとめられよう。

(3) 球技の戦術の特殊概念とその対象

球技の戦術の分類の視点に基づいて、氏の特殊概念とその対象をみると、いずれも妥当性がみとめられる。

3. 球技の戦術の諸概念についての筆者らの補足

既述のように筆者らは、G. スティラーの球技の戦術の諸概念の分類やそれらに基づく対象については、基本的にこれらを支持するものである。しかし、氏の球技の戦術の一般概念 (A) の対象について、氏の戦術の一般概念 (A) を視点にすると、氏のあげる戦術行動、戦術の要素等6つの諸概念の他に、戦術の一般妥当的なかつ理論的な基礎にかかわる対象の幾つかを加えることもできるように思われる。また、球技の戦術の一般概念 (B) の対象としてとらえられているオフense、ディフェンス、システム等の諸概念の論述や、更に氏の戦術の一般概念 (B) に基づいて新たにとらえられる対象やそれらの概念の論述も必要になるように考えられる。球技の特殊概念の対象は、G. スティラーの概念に基づいて種々

な対象やそれらの概念の論述も必要になろう。

III. 筆者らの補足する球技の戦術の一般概念並びに特殊概念の対象

1. 球技の戦術の一般概念 (A) の対象

G. スティラーの述べる球技の戦術の一般概念 (A) の対象のなかの「球技の戦術の概念」は、戦術の一般概念のなかで中核となる概念であるので、基礎的、一般的な概念になろう。氏はこの対象について、球技の「戦術の概念」または「戦術の一般概念」という用語を使用しているが、特に後者の用語については、小論 II-1-(1) で氏の述べる戦術の一般概念と混同されやすいので、前者の用語を使用するかあるいは後者については、例えば戦術の基礎的な概念というように、戦術の一般概念と区別して使用する方が用語の混乱を避けられるように思われる。

球技の戦術の一般概念 (A) の対象では、前記の国際的に解決のみられない種々多様な戦術の概念について、わが国の球技の戦術等の研究者、現場の監督やコーチ (以下これらを専門家と仮称) が、どのようにとらえているかを明らかにした後、戦術の一般概念 (A) の対象の補足として、球技の戦術体系、球技の戦術の練習体系並びに集団運動学における戦術行動のカテゴリーについて論述する。

① わが国の球技の研究者、専門家のとらえる戦術の概念

わが国の球技の研究者、専門家のとらえる戦術の概念については、バスケットボールを初めとする主要な球技種目について調査し述べる必要があるが、未だそれらの調査が終わっていないので、ここではバスケットボールのみの調査結果の概要にとどめる。

筆者らは、昭和 59 年 4 月 10 日より約 1 ヶ月間にわたり、小論 II-1-(1)-i-①に記述する先行研究者等の戦術の表記に、若干修正を加えるとともに、他に「試合を有利にするためのかけひき (傍点は筆者)」を加えた 14 項目について、バスケットボールの戦術等にかかわる研究者 (これは、日本体育学会の体育方法専門分科会員、全国バスケットボール研究者懇談会員) 62 名 (このなかにはチームの部長、監督等の役職者が 32% みられる)、専門家 (高校、大学、実業団男女のトップレベルのチームの監督など) 62 名、小計 124 名を対象にして調査した。回収率は 84% でその結果、研究者 51 名、専門家 61 名、小計 112 名になる。

回答者には、調査用紙に記載してある戦術の概念のな

かから自己のとらえている戦術の概念に類似している概念の項目番号を 5 つ以内に指定するように求めた。回答者に 5 つ以内の指定を求めたことは、調査項目の内容の中に類似性がみられ容易に指定がむづかしいこと、更に予備調査の結果から判断し、回答者の指定にバラツキがみられることを予想したためである。

研究者のなかで指定の多い項目番号とそれらの内容は、⑩合目的な個人的かつ集団の行動で相手を効果的にうちたおすために使用される競争方法 67.9%, ⑫競争の指揮や指導に関する理論 45.3%, ③ある目的を達成するための方法 41.5%, ⑤プレーヤーが勝利を得るための目的になかった行動 39.6% の順で、この他戦術の対象にはとらえられないが、⑭試合を有利にするためのかけひき 58.5% が特記される。指定の少ない項目番号とそれらの内容は、⑪相手と競うことの出来る能力 1.9%, ⑨全てのプレーヤーの相互理解の合流 5.7%, ⑥個人的行動と集団の行動の編成 5.7% の順である。専門家のなかで指定の多い項目番号等は、⑩ 67.2%, ③, ⑫のそれぞれが 55.7%, ⑤ 44.3%, 指定の少ないそれらは、⑪ 6.6%, ⑦プレーヤーのとるべき処置と行動の決定 13.1%, ⑨ 16.4% の順である。研究者、専門家のそれぞれが多く指定している同一項目では、専門家の指定の割合が研究者のそれよりも高くなる傾向がみとめられるが、指定の多少の順位については類似する傾向がみとめられる。

研究者、専門家のそれぞれに多い指定の諸概念は、⑩, ⑬等のように勝利を獲得するための直接的な方法であるに対して、少ない指定の諸概念は、⑪, ⑥等のように勝利の獲得に必要な戦術行動等の諸準備や前提条件の整備等になることや、また、研究者、専門家の戦術の諸概念の指定の多少の順位が類似する傾向のみとめられる等については、種々な要因のあることと考えられるが、その 1 つに、研究者、専門家の殆んどがこれまで共通の場で勝利の獲得を試行し、現在でも研究者の 20% は、その獲得を追求しているという過去や現在の経験から、戦術は勝利を獲得するための直接的な競争方法にかかわる概念としてとらえているためではなかろうか。また、G. スティラー並びに氏のあげる 2 人の対蹠的な戦術のなか、G. スティラーとツウットリンには、研究者、専門家の回答者の約 40% 以上の然も専門家の方が多く両氏と類似した概念のとらえ方をしている。ここで特記すべきことは、紀要、第 14 巻、第 2 号にも一部報告しているように、戦術を理論の対象としてとらえるとともに、活動の対象としてとらえる回答者 (研究者と専門家の総

体)が、51.1% みられ、戦術を理論の対象としてのみとらえる回答者が殆んどみとめられないことである。

バスケットボールにかかわる研究者、専門家の戦術の概念については、指定が広範囲にわたること、⑭の回答者の多いこと等から、わが国のバスケットボールにかかわるそれらには、G. スティラーの論述と同様に、球技の戦術の概念については幅広い種々なとらえ方がみとめられる。

筆者らは、球技の戦術の概念については、紀要、第14巻、第2号に論述するように、競争の指揮に関する理論とその場で最も有効な競争手段に関する理論⁷⁾であると考えている。

② 球技の戦術体系

球技の戦術には、戦術行動の体系化が必要になろう。例えばバスケットボールでは、バスケットボールの特殊戦術の本質的な特性を原理、原則にし、その上にバスケットボールの攻撃、防御の戦術行動をゴールからの距離や空間の遠近によって、(i) ゴール近くの空間の特殊戦術、(ii) ゴールより離れた空間からゴールへ近づく特殊戦術の2つに分類し、後者については行動形態の異なる3つの基本的な行動形態、特定な特殊戦術⁹⁾とそれらの防御の行動形態や防御の特定な特殊戦術が系統的に構築される。このような攻撃、防御の特殊戦術の体系化は、他の球技種目にも適用され一般化されるので、球技の戦術の体系としてとらえられよう。そこで「球技の戦術体系とは、球技の戦術の本質的な特性を原理、原則にし、その上に一般化された球技の戦術行動を系統的に構築された全体である」。

③ 球技の戦術の練習体系

球技の戦術行動の練習では、戦術体系に基づき集団運動学における戦術行動のカテゴリー(後述)の達成に必要な系統的、段階的な練習過程が必要になろう。

球技種目の各戦術行動の形成には、各戦術行動の基本的な技術の要点に基づいて、その戦術行動の構造や練習形態を系統的、段階的に発展させることが重要になろう。球技の戦術行動の練習では、初期に体得された特定な戦術行動の技術の要点が、その後の特定な戦術行動の練習の基礎になるとともに、それらに十分生かされ一般化されていることである。従って、運動能力等の差異のみられる競技者でも、このような練習過程に基づくとある水準までの戦術行動を能率的に体得できるようである。しかしわが国の球技の研究者や専門家の多くには、戦術体系の確立がみられずまた練習過程や戦術行動の構造分析等が客観的に容易にできないので、これに代る指

導者の指導法と競技者の練習法を一体化させ、系統性よりも段階性に比重をおいた実技教程等を考案しているが、これは、球技の戦術体系に基づいて、1つあるいは2, 3の戦術行動の練習過程を系統的に構築されたものとは言えないので、これを練習体系というには問題が残ろう。そこで「球技の戦術の練習体系とは、球技の戦術体系に基づいてその体系の中にみられる1つあるいはそれ以上の個人的、集団的な戦術行動の高度化を志向し、戦術行動の特定な技術の要点に基づき、練習の形態や構造を系統的に発展させた練習過程の全体である」。

④ 集団運動学における戦術行動のカテゴリー

K. マイネルは、「運動学におけるカテゴリーを、運動の協応性、熟練性の程度を表わす運動学独自の基本概念である⁴⁾」と述べ、その対象に、運動構造、運動調和、運動伝導等8項目⁴⁾をとらえている。このようなカテゴリーは、個人運動学のみならず個人戦術を個有の対象とする対人運動学¹³⁾や、集団戦術を個有の対象とする集団運動学にも必要になろう。集団運動学では、個人戦術の構成要素である個人技術や、個人戦術等の熟練性等の程度は、K. マイネルのあげるカテゴリーによってもとえられるが、更に集団戦術やそれを構成する個人戦術の協応性、熟練性の程度は、集団運動学の立場からそれらのカテゴリーとしてとらえることも必要になろう。

ところで、集団運動学において個人的、集団的戦術行動のカテゴリーは、換言するとそれらの高度化の指標としてとらえることもできよう。そして、それらのカテゴリーには、動きの予測と先取、準備局面における動きの時間的、空間的な縮小、動きのバランス、動きの順次性等13項目⁴⁾がみられる。K. マイネルの運動学のカテゴリーは、熟練性、協応性の程度を個別的なカテゴリーやそれらの組合せによってとえられるのに対して、集団運動学における個人的、集団的戦術行動のカテゴリーは、競技者の漸増にともなって系統的、積み上げの的にとえられることに両運動学におけるカテゴリーのとらえ方の主要な特徴がみられる。「集団運動学における戦術行動のカテゴリーとは、系統的に試行される個人的、集団的戦術行動の協応性、熟練性の程度を表わす集団運動学の基本概念である」。

2. 球技の戦術の一般概念(B)の対象

(1) G. スティラーの球技の戦術の一般概念(B)の対象について筆者らの論述

G. スティラーの戦術の一般概念(B)の各対象の用語については、これまでわが国や諸外国において簡単な説明のみられる程度で、ましてそれらを特定な視点によっ

て定義されたものは殆んどみられないように思われる。そこで、ここでは、筆者らのこれまでの研究により得た知見や一般化された用語の概念を視点にし、若干の対象について論述する。

① オフェンス

球技の攻撃は、球技の基本的な特性の1つである集団的な対峙、得点を追求する⁹⁾並びに攻撃の2面的な機能⁹⁾の2つを視点にすると、「球技のオフェンスは、集団的な対峙を打破し得点を試行するとともに、相手よりボールを奪われないように操作する」。

② ディフェンス

ディフェンスは、オフェンスと表裏の関係にあるので、球技の基本的な特性の1つである集団的な対峙、得点を阻止する⁹⁾並びに防御の2面的な機能⁹⁾を視点にすると、「球技のディフェンスは、集団的な対峙を維持し得点を阻止するとともに、ボール操作者のボール操作を妨害したりボールを奪取する」。

③ フォーメーション

これは、組織、編成、構成、隊型¹⁰⁾と記述されているが、これに基づくと球技のフォーメーションは、戦術行動の効果的な展開のための組織、編成になろう。これは攻撃、防御のそれぞれにみられる。例えば攻撃では、相手の特定な防御法に対して組織化された戦術行動によって、相手方との対峙を打破し得点を試行することになる。「フォーメーションとは、攻撃、防御が各課題を合目的、経済的に解決するため組織化された戦術行動のまとまり、または全体である」。また、戦術行動は、合目的、経済的に試行されることが必要になるので、「組織化された戦術行動のまとまり、または全体である」。

④ システム

情報科学の領域では、情報の交換と制御の過程を構成している要素群と定義されている¹¹⁾が、ここではむしろ体系、方式、順序、配置¹²⁾のことで、これに基づくと球技のシステムは競技者の配置、畢り、戦術行動の隊型のことになろう。例えば、バスケットボールの攻撃には、2-3 システム、3-2 システムと呼称される一般化された攻撃隊型がみられる。このことについて、H. デーブラーは、「空間的、時間的に打ち出されたチームプレーの実施の基本形態であり¹³⁾」、また、「プレーからプレーへと移り変ることのない一定不変の形態であって……¹³⁾」と述べている。このようなシステムのとらえ方は、これまで一般的にみとめられているが、然し、システムのもつ一般的な訳語である体系、系統、順序を表出すると、むしろシステムを「体系や系統をもつ隊型」としてとら

え、特定な隊型から所定の原則的な動きに基づいて系統的に展開される戦術行動の全体としてとらえることも可能のように考えられる。どのような攻撃隊型を原点に使用するかは、彼我の体格、体力、運動技能等に基づき、味方の攻撃を効果的に発揮できる可能性によって選定されるが、時には特定な隊型からの組織的な動きが特定チームに定着し、伝統的な攻撃法として採用されている場合もみられる。このような隊型は防御にもみられる。そこで新たな概念として「システムとは、攻撃、防御において各課題を効果的に解決するために特定な隊型を原点にし、所定の原則的な動きに基づいて組織化された戦術行動の全体である」。

〈参考〉 システムとフォーメーションの関連性

これまでのとらえ方からすると、システムという用語は、球技の戦術行動の基本的な形態または隊型であり、フォーメーションは特定な隊型より初められる戦術行動のまとまりであるので、2つの用語には、システムがフォーメーションの原点になり、また、フォーメーションのなかにはシステムがみられるという関連性になる。これに対して筆者らが新たにとらえるシステムの概念で2つの用語をみると、システムは単なる競技者の配置や隊型にとどまることなく、特定な隊型から所定の原則的な動きに基づき組織化された戦術行動の全体になり、フォーメーションは前記の記述のようになるので、両者には戦術行動が特定な隊型より組織的に試行されることに類似性がみとめられる。即ち、特定な隊型より所定の原則的な動きに基づいて組織化された戦術行動の全体(システム)のなかには、1つないしそれ以上の組織化された戦術行動のまとまり(フォーメーション)がみとめられる関連性になる。換言すると、フォーメーションは、システムの構成要素になっている。一方、戦術行動のまとまりということ強く表出して解釈すると、システムという戦術行動の全体は、1つのまとまりになるので、2つの用語は同意語になろう。

⑤ ポジション

ポジションとは、位置、場所¹⁰⁾等と記述されている。球技では競技者がコート上で占める位置のことになろうが、攻撃、防御における競技者のコート上の位置は、当面の課題を効果的に解決するため、ゴールの位置、パスの方向や飛距離の範囲、ボール保持者の位置、味方競技者間の距離、攻撃、防御の各競技者の対峙の間隔等を前提にして規定される。したがって各競技者のポジションは課題解決のために妥当性の高い位置になろう。そこで、「ポジションとは、各競技者が攻撃、防御を合目的

的、経済的に試行するためコート上で占める妥当性の高い位置である」。なお集団的スポーツでは、ポジションは、ビジョン、コミュニケーションとの関連でとらえることが必要¹⁹⁾になるが、G. スティラーにはこれらの対象はみとめられない。

(2) 筆者らの補足する球技の戦術の一般概念 (B) の対象

以下は、筆者らの補足する球技の戦術の一般概念 (B) の対象である。これは、G. スティラーの戦術の一般概念 (B) に基づき、競技者が相手よりも優位に戦術行動を試行するという視点より得られるものである。

① 戦術行動の空間の利用 (または戦術行動の空間の占有と利用)

攻撃、防御の競技者が、個人的行動や集団的行動において相手より広い空間を占有し利用することである。相手より広い空間の利用には、相手との対峙の打破や維持が必要になろう。相手との対峙の打破や維持は、攻撃、防御の1つの行動目標になる。これらに関連する対象に、G. スティラーの述べる行動範囲がみられる。これはコート上で競技者が行動できる範囲のことで、それは行動目標によってきめられる。従って空間の利用と行動範囲には、目標と手段の関連性がみとめられる。

競技者の行動で相手よりも広い空間の利用のなか特に重要なものは、得点とその阻止にかかわる諸行動になる。攻撃では、ゴール近くで攻撃側が防御側よりも、時間的、形態的、数量的に優越することによって、相手方より広い空間を利用でき効果的な攻撃が可能になる。防御においても、攻撃側よりも時間的、形態的、数量的にすぐれることが、広い空間の利用になるが、ただし、防御に限って相手方と形態的に同等であっても適切に対峙を維持すると、攻撃側よりも内側¹⁴⁾ (ゴールに近い地域) に位置できるので、相手側よりもゴール近くの空間を広く利用でき、効果的な防御が可能になる。このようなことから、戦術行動における空間の利用は、攻撃、防御の1つの行動目標になるとともに、特殊的な目標の達成のための前提条件として、その可能性を高めることもできよう。「戦術行動の空間の利用とは、個人的行動や集団的行動のそれぞれにおいて、相手よりも広い空間を利用し、攻撃、防御の特殊的な目標の達成の可能性を高めることである」。

② 攻撃行動 (または攻撃の戦術行動) の漸増的な数量化

これは、攻撃の戦術行動で攻撃側が防御側との対峙の打破を試行するための一般化された方法である。攻撃の

戦術行動では、相手との対峙の打破により得点を試行するため、戦術行動におけるカテゴリーに基づき、ボール保持者が相手との対峙の打破を試行するが、それが不可能な場合には、ボール保持者にかかわる味方競技者が、相手との対峙の打破を試行し、ボール保持者に協応する。従って、そこには、攻撃行動の漸増的な人数の数量化等による戦術行動の展開がみられる。「攻撃行動の漸増的な数量化とは、集団運動学のカテゴリーに基づき、ボール保持者とこれにかかわる味方競技者による戦術行動の系統的な人数等の漸増によって、相手方との対峙の打破を漸増的に行なうことである」。

③ ビジョン

ビジョンとは見ること、視野、視覚¹⁰⁾等と記述されている。これに基づく競技者のコート上における視野のことになる。スポーツ心理学では、視野の全範囲を正確に見ることが、プレーの成否にかかわることを述べている²¹⁾。バスケットボールでは、防御の基本的な原則として、記述のポジション、ビジョン、後述のコミュニケーションの3つをあげている。しかし、これらの原則は、ボール保持者とこれにかかわる味方競技者並びにそれらの防御者の戦術行動の効果的な展開ということを視点にすると、防御のみならず攻撃においても主要な原則になる。元来、ポジション、ビジョン、コミュニケーションは、攻撃、防御の基本的、集団的な戦術行動として構造的にも機能的にも関連性をもっている。すなわち、これらのなかポジションとビジョンについてみるに、攻撃、防御において各競技者がコート上で占める妥当的なポジションは、味方や相手を同時に自己の視野に入れながら相手との対峙のできる位置になるので、2つは密接不可離の関係になる。「ビジョンとは、各競技者がポジションと関連づけ、適切な視野を投入することである」。

④ コミュニケーション

これは、伝達、通信、連絡等と記述されているが、バスケットボールでは、意志の疎通、密度の高い相互の連絡ということになる。コミュニケーションは、球技の各種目において、一般化される必要性のある原則である。球技における攻撃、防御の有効な戦術行動の展開には、ポジション、ビジョンと関連づけた味方相互の意志の疎通¹⁹⁾によって強固なチームワークの形成が必要になる。「コミュニケーションとは、各競技者が、ビジョン、ポジションと関連づけ、味方相互の高度な意志の疎通を図る」。

⑤ 各系統の基本的な行動形態

ゴール型球技のゴールから離れた空間からゴールへ近

づく特殊戦術²⁾、また、ネット型球技のネット近くの空間の特殊戦術は、紀要、第13巻、球技の特殊戦術に関する研究¹⁶⁾に記述するように、マン・アヘッド・オブ・ザ・ボール (Man ahead of the ball) 系統を初めとする3系統等の基本的な行動形態と特定な特殊戦術になるが、ここではそのなかの基本的な行動形態のことである。集団のスポーツでは、2人の連けいプレーは、個人的技能と集団的技能のなかの組織的プレー¹⁶⁾を結びつけるとともに、組織プレーの基本型¹⁷⁾とみなされているので、これらを戦術行動に適用すると、各系統の基本的な行動形態は、個人戦術と集団戦術のなかのチーム戦術を結びつけるとともに、チーム戦術である特定な特殊戦術の基本型になっている。「各系統の基本的な行動形態とは、個人戦術とチーム戦術 (いずれも特定な特殊戦術) を結びつけるとともにチーム戦術の基本型になる行動形態である」。

3. 戦術の特殊概念の対象

G. スティラーの球技の戦術の特殊概念に基づいて、例えば、バスケットボールの試合を観察すると、戦術の特殊概念の対象には、つぎの2つがとらえられる。

(1) 戦術の特殊概念の対象 (A)

これは、攻撃、防御の各戦術行動を試行するための前提やそれらを規定するための条件等になる戦術行動である。これには、①身体接触の禁止、②チャージドタイムアウト、③メンバーチェンジ、④出場停止等があげられる。それらの若干について概念を述べる。

① 身体接触の禁止

ネイ・スミスの作成したバスケットボールの5原則の1つであり、現代のバスケットボールの戦術行動を試行する諸前提の1つである。バスケットボールの試合は、狭いコートの中で10名の競技者が、攻撃、防御を行なうので、攻撃、防御の競技者相互には身体接触も多くみられるが、特にそれらが身体接触の禁止の反則になるのは、身体接触を発生させた責任が明確であり、それを発生させることによって、その後の味方の戦術行動や相手方のそれらが、有利、不利に展開される場合である。したがって単なる身体接触ではない。「身体接触の禁止とは、競技者相互において身体接触を発生させた責任が明確であり、それを発生させることによって、其の後の味方や相手方の戦術行動に影響 (有利、不利になること) を与える行動の禁止である」。

② チャージドタイムアウト

これは、試合中において相手チームの戦術行動等に対する自チームの対策等を、コーチ等が競技者に、主将等

がチームメートに伝達、協議するため、コーチはオフィシャル席に主将は審判に請求することによって認められるタイムアウトである。タイムアウト中のコーチ等と競技者の行動には、これを請求したコーチ等のみと競技者が、戦術行動等についてその対策や方法を伝達、協議できる種目、また、請求したチームのコーチ等と競技者と同様な行動を、請求しない相手チームもとることのできる種目等がみられる。「チャージドタイムアウトとは、試合中において相手チームの戦術行動等に対する自チームの戦術行動等の対策、方法等を、コーチ等が伝達、協議する等のためにとられるタイムアウトである」。

(2) 戦術の特殊概念の対象 (B)

これは、攻撃、防御それ自体の戦術行動である。これには、①攻撃としてカットイン、スクリーン、ポスト等の戦術行動やこれらに基づく集団的な戦術行動 (またはチーム戦術行動) 等、②防御としてスライドスルー、スウィッチ、ダブルチーム等の戦術行動やこれらに基づく集団的な戦術行動等である。これらの戦術行動は、わが国や諸外国のバスケットボール等の文献、図書等の多くに、用語の解釈として簡単に記述されているが、ここでは紙面の都合上それらの諸概念の論述を省くことにする。

IV. 球技における戦術の一般概念と特殊概念の関連性

球技の戦術の一般概念には、(A) と (B) の2つがみられ、それらの概念に基づく各対象がとらえられる。また、球技の戦術の特殊概念にも、それらの概念に基づく2つの対象がとらえられる。戦術の両概念やそれらに基づく対象の関連性では、これまでの戦術研究の歴史的な経過を重視し、先づ戦術の実際にかかわる概念として球技の戦術の一般概念 (B) と球技の戦術の特殊概念について、それらの諸概念に基づく各対象より両概念の関連性をとらえ、その後球技の戦術の一般概念 (A) と一般概念 (B) を同様な手順によってそれらの関連性をみることにする。

球技の戦術の一般概念 (B) に基づく対象例えば、空間の利用、オフフェンス、ディフェンス等と球技の戦術の特殊概念に基づく対象例えば、(A) 攻撃、防御の各戦術行動を試行する諸前提や (B) 攻撃、防御の各戦術行動自体についてみるに、球技の戦術の一般概念 (B) に基づく各対象は、それらの諸概念からみとめられるように、球技の戦術の特殊概念に基づく各対象の基礎や前提になっている。換言すると、球技の戦術の特殊概念の各

対象は、球技の戦術の一般概念 (B) の各対象に基づくことになる。したがって、球技の戦術の一般概念 (B) と球技の戦術の特殊概念には、基礎と応用に類似した関連性がみとめられることになる。このことは、また球技の戦術の一般概念 (B) から球技の戦術の特殊概念へ分化、体系化していると言えよう。球技の戦術の一般概念 (A) に基づく対象例えば、戦術行動、戦術の手段等と球技の戦術の一般概念 (B) に基づく対象、例えば前記のこれらについてみるに、球技の戦術の一般概念 (A) に基づく対象は、球技の戦術の一般概念 (B) に基づく対象の基礎や前提としてとらえられる。したがって、球技の戦術の一般概念 (A) と球技の戦術の一般概念 (B) には、基礎とそれに基づく、換言すると応用に類似した関連性がみられ、球技の戦術の一般概念 (A) から一般概念 (B) へ分化、体系化していると言えよう。つまり、球技の戦術の各概念の相互には、球技の戦術の一般概念 (A) に基づいて球技の戦術の一般概念 (B) がとらえられ、球技の戦術の一般概念 (B) に基づいて球技の戦術の特殊概念がとらえられる関連性になる。このことは、球技の戦術の一般概念 (A) を理論的な基礎にし、それより球技の戦術の共通する実際的な概念として球技の戦術の一般概念 (B) がとらえられ、更にそれらの概念に基づいて、球技の戦術の特殊概念がとらえられるように体系化されているように考えられる。これらのことは、また、球技の戦術の一般概念 (A) から球技の戦術の一般概念 (B) へ、更に球技の戦術の特殊概念へ分化しているように考えられる。

V. 結 語

本研究は、G. スティラーの球技の戦術の一般概念 (A)、一般概念 (B) とそれらの対象並びに球技の戦術の特殊概念とその対象を紹介した後、これらの諸概念や対象を特定な視点によって考察し、妥当性をみとめた。氏の球技の戦術の一般概念 (A) の対象に、戦術体系、集団運動学における戦術行動のカテゴリー等を補足し、各対象の概念を明らかにした。また、氏の球技の戦術の一般概念 (B) の各対象であるオフense、ディフェンス等の諸概念を筆者らが論述するとともに、更に (B) の対象に空間の利用、攻撃行動の漸増的数量化、ビジョン等を補足しそれらの諸概念を明らかにした。球技の戦術の特殊概念は、攻撃、防御の戦術行動の試行において諸前提となる戦術行動と戦術行動それ自体の2つに分類し、それらの対象の若干について概念を明らかにした。

球技の戦術の一般概念と特殊概念の関連性では、球技の戦術の一般概念 (A) を理論的な基礎とし、その上に球技の戦術の実際概念として球技の戦術の一般概念 (B) をとらえ、それらに基づいて球技の戦術の特殊概念がとらえられ、球技の戦術の諸概念が体系化されることについて論述した。

(本研究は、稲垣をリーダーとする共同研究であるが、小論のまとめと執筆については、稲垣が担当した)

引用・参考文献

- 1) G. スティラー (谷釜・稲垣訳): 球技戦術論, 新体育 6 月号-12 月号, 新体育社, (1980).
- 2) 稲垣安二: 球技の戦術体系に関する研究, 日本体育大学紀要, 11, 2-9 (1982).
- 3) H. デーブラー (稲垣・上平・谷釜訳): 球技運動学, 不昧堂, 268 (1985).
- 4) 岸野・松田・宇土: 序説運動学, 大修館書店, 25-26 (1968).
- 5) 稲垣安二: 球技における戦術体系の一考察, 日本体育大学紀要, 6, 13 (1976).
- 6) 稲垣安二他: バスケットボールの攻撃の特殊戦術に関する研究, 日本体育大学紀要, 11, 101-103 (1982).
- 7) 稲垣安二他: 球技の戦法の基本概念に関する一試論, 日本体育大学紀要, 14 (2), 5-7 (1985).
- 8) 稲垣安二他: 球技に関する研究, 日本体育大学紀要, 8, 4 (1979).
- 9) 稲垣安二: 球技の戦術に関する一考察, 日本体育大学紀要, 10, 4-6 (1981).
- 10) 岩村・川村編: 研究社英和大辞典, 研究社, 690, 1389, 2039 (1969).
- 11) 細谷・奥田・河野編: 教育学大事典, 第7刷, 第一法規, 141 (1979).
- 12) 研究社英和大辞典編集部: 新英和大辞典, 研究社辞書部, 1839 (1960).
- 13) 稲垣安二: スポーツ競争の戦術に関する一試論, 日本体育大学紀要, 9, 4-20 (1980).
- 14) 吉井四郎: バスケットボール, 不昧堂書店, 134 (1965).
- 15) 稲垣安二: 月刊バスケットボール, Vol. 3, No. 11, 日本文化出版社, 92 (1975).
- 16) 稲垣安二他: 球技の特殊戦術に関する研究, 日本体育大学紀要, 13, 2-8 (1984).
- 17) 稲垣安二編: 教科におけるバスケットボールの指導, 世界書院, 180 (1977).
- 18) 桜体球技研究会: 球技の戦術についての研究 (1984).
- 19) 稲垣安二他: 球技の一般戦術と特殊戦術に関する一試論, 日本体育大学紀要, 12, 17 (1983).
- 20) 稲垣安二編: バスケットボールの指導体系, 梓出版社, 15 (1978).
- 21) 松井三雄編: スポーツ心理学, 同文書院, 64 (1959).